

九州ルーテル学院「建学の精神」考

—『建学の精神』検討委員会』の活動報告結果として—

金 戸 清 高・内 村 公 春
栗 原 希代子・崔 大 凡

A Study of the Founding Spirit of Kyushu Lutheran School

Kiyotaka Kaneto・Kimi haru Uchimura
Kiyoko Kurihara・Choi Daebun

1. はじめに

2020年度4月、九州ルーテル学院常議会において「『建学の精神』検討委員会」（以下「委員会」と称す）が学院レベル委員会の1つとして組織された。目的および内容は以下の通りである。

- ①「感恩奉仕」及び学院聖句とともに、学院で統一的に使えるように文章化し、明確な位置づけを行うことを目的とする。
- ② 期間については、2020年9月29日の理事会にて最終報告をすることを目指す。
委員：内村公春（委員長）、金戸清高（大学代表）、栗原希代子（中高代表）、崔大凡（チャプレン）

本稿執筆の主旨は本学設立の理念に関わる「建学の精神」、「学院聖句」および「学院標語」が本来どのようなものであったか、またやがて創立100周年を迎える本学院が上記のものを今後も持続可能な文言として上記「委員会」が必要に応じ成文化する過程を記録としてとどめること、そして同委員会がこれまでの活動を通じて蒐集した資料および歴史的証言を遺すことにある。来たる100周年には新たに学院の「ミッション・ステートメント」が定められることになるであろうが、そうした作業に向けての足がかりとなればとの思いからなる。

なお「委員会」は内村委員長の主導の下で各委員が様々な調査をしてきたが、紀要の主筆が規約上本学の教員でなければならぬため、金戸が筆頭に掲

げられていることをお断りしておきたい。

2. 問題の所在

私立学校は「私立学校法」第1条に謳われたように「私立学校の特性にかんがみ、その自主性を重んじ、公共性を高めることによつて」、その「健全な発達を図ることを目的と」している。それゆえ私立学校はいずれも「自主性」と「公共性」を重んじた「建学の精神」を根幹として設立されている。建学の精神とは私学の存立の根幹に関わる重要な精神であることは言うまでもない。本学院「九州ルーテル学院」は、前身の「九州女学院」創設の1926年以来、そうした建学の精神に基づいて存続している。本学院がやがて100周年を迎えようとしているのは、ひとえに設立以来多くの苦難を乗り越え、絶えず神と地域から愛され続けてきた所以であり、感謝に堪えない。

ところが近年本学院の「建学の精神」という言葉の用いられ方に混交が見受けられるようになった。「資料1」は北村敏夫将来計画室長（2019年当時、現大学事務部長）の指示により石田豊美法人総務課長が調査した内容である。

管見によれば金戸が九州女学院短期大学（1975～1998）就任時の1990年に教えられたのはおおよ以下の通りであった。¹

建学の精神とは〈女子にキリスト教の精神に基づく人格教育を行うこと〉であり、それは学院聖句「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊か

資料 1

◇建学の精神 教育理念（学院 HP）

九州ルーテル学院の前身である九州女学院は、初代院長マーサ・B・エカードの指導のもと「感恩奉仕」の精神を掲げて、愛と奉仕に生きる人格を育成する学風を築いてきました。
「感恩奉仕」とは、神の深い恵みに感謝し、その感謝を恩義として受け止め、神と隣人へ奉仕を実践していくものです。

◇学院の目指す教育（学院 HP）

「感恩奉仕」を建学の精神に掲げた本学院は、「キリスト教精神に基づいて、全人格を磨き、神と人と社会に対して最善を尽くして、愛と奉仕に生きる有能な人材の育成」をめざしています。

この建学の精神は、九州ルーテル学院の生命として、創立から今まで幼稚園、中学校、高等学校、大学、大学院にいたるまで一貫して継々と受け継いできました。

九州ルーテル学院の人格教育を基盤づけるキリスト教精神を学ぶために、毎日の礼拝（讃美歌、聖書朗読、説教、祈り）、宗教オリエンテーション、クリスマス礼拝等、のプログラムを行っています。これらのプログラムは、本学院の基本教育プログラムである学校行事として位置づけられています。

◇理念について（大学 HP）キリスト教精神「感恩奉仕」を基盤に全人格を磨く

・校章の意味：

学園の府を意味するベンをかつたどった校章の中心には、ルーター（ルーテル）紋章に刻まれている十字架の心を単純化した“赤い丸”が配されています。この一点こそが、学院の原点「福音」でもあります。大学を巣立つ皆さんが「神様の恵みに感謝し、神と人に仕え（奉仕する）＝感恩奉仕」に生きるからこそが、九州ルーテル学院の理念であり、使命であると考えています。

◇学校長あいさつ（高校 HP）

・エカード先生が残した「感恩奉仕」と言う言葉です。

「生かされていることに感謝し、神さまと人に役に立つ人間になる」と言う意味です。

◇高校パンフレット

「感恩奉仕」 神の愛と恵みに感謝して神と人に仕える者となる

◇教職員 HP 学院の歴史資料から

感恩奉仕 v 「感恩奉仕」をいつから使い始めたか? - 1930 年の「学校状況調べ」には、校訓を「愛の奉仕」と報告。 - 1935 年の卒業アルバムに「感恩奉仕」の言葉 - 1937 年の女学院新聞にエカード先生が「九州女学院魂、感恩奉仕が私どもひとりごとになり与える意味は・・・」 - 1954 年にエカード先生が「Grateful Service」と英訳

v 西南女学院の「感恩奉仕」 - 1929 年、原松太主事と C.H.ロウ院長が「感恩奉仕」、「実践修行」、「知的教育」を教育方針に採用 - ペラ・キャンベル先生が「Gratitude and Service」と英訳
九州女学院が目指した教育 v 豊かな命(Abundant Life)を得させる教育 - 外面的には、奉仕者として立つための上級学校進学・だから、上級学校への進学が認められた日(1928 年 10 月 3 日)が創立記念日になった。 - 内面的には、イエス・キリストとの出会い・キリストとの出会いなくして真の豊かな命はない v これが、感恩奉仕の人生 - 奉仕者として立つ・私がかここにあります。私を遣わしてください。(イザヤ 68)・男女共学とは矛盾しない

に受けるためである。」(ヨハネ10:10b 新共同訳聖書による)に顕著であり、また本学院は「感恩奉仕」を学院標語としている。

当時の学則(九州女学院短期大学)を振り返ると、1997年、短期大学最終年度の学生便覧に記載された学則第2条に次のように記される。

(目的・使命)

第2条 本学はキリスト教の精神に従って、教育基本法および学校教育法の定めに則り、高等学校教育の基礎のうえに、女子の全人格を磨き、教養と実際に役立つ専門学術の理論及び技能を享受研究するを目的とし、神と人に対し最善を尽くして愛と奉仕に生きる人物の育成を使命とする。(傍線引用者、以下同)

なお第2条の文言は記念誌「九州女学院の五十年」²に「附録」として掲載された資料にあるもの(抜粋につき何年のものか不明)、また「九州女学院短期大学23年の歩み」³ともに異同はなく、短期大学の学則が閉学まで不変であった可能性は高い。

「資料2」は同便覧における学院聖句、標語、校章、教育方針および沿革である。校章については実際の画像がある方が見やすいと判断し、PDFを添付

した。

ここで大学での理念の変遷を辿っておく。まず学則に定められた理念は第1条に定められる。

第1章 目的及び使命

(目的及び使命)

第1条 九州ルーテル学院大学(以下「本学」という。)

は、キリスト教の精神を基盤にして、教育基本法及び学校教育法の定めに則り、「感恩奉仕」の学風のもとに、深く専門の学芸を教育研究し、職業及び社会生活に必要な教育を施し、あわせて情操豊かで国際性に富む全人的な人間性を涵養し、もって広く福祉と社会・文化の向上に資する人材を育成することを目的とする。

ここでは「感恩奉仕」を「学風」と位置づけていることが確認される。ところが右に添付する「教育理念」では「学校法人九州女学院の建学の精神『感恩奉仕』に沿った全人教育の伝統を受け継ぎ」とあり、「建学の精神」＝「感恩奉仕」となっていることが窺える。

更に2003年度(本学に心理臨床学科が開設)学生便覧における教育目標は「資料3」のようになっている。

本学は、建学の精神である「感恩奉仕」にのっとった全人格的教育の伝統を受け継ぎ、キリスト教精神に基づく文化的伝統を、豊かな国際的感覚をもって生かすことのできる人間教育をめざす。

また社会人として通用する教養教育と社会の現実実際に役立つ専門教育をおこなうために、「人文学部」のもとに「人文学科」と「心理臨床学科」を置く。

既に学内では「建学の精神」と「学院標語」とが同一のもののような理解がなされており、以後こうした混用が常態化していったとみられる。

ここで私学経営の憲法に相当する「寄附行為」についても触れておく。記念誌「九州女学院の五十年」に収められた資料には1975年に改定された「学校法人九州女学院寄附行為」が収められている。

第2章 目的及び事業

(目的)

第3条 この法人は、教育基本法及び学校教育法に従い、キリスト教主義に基づいて学校教育を行うことを

目的とする。

1975年には既に九州女学院幼稚園および九州女学院短期大学が設立されており、創設時の文言とは違っているだろうが、〈キリスト教主義に基づく人格教育〉という設立以来の理念は貫かれている。以下は現在の「学校法人九州ルーテル学院寄附行為」である。

第2章 目的及び事業

(目的)

第3条 この法人は、教育基本法及び学校教育法に従い、キリスト教の精神をもって幼児の健全なる発達を

授け、中等普通教育又は高等普通教育並びに専門教育を施すことをもって目的とする。

附則によれば第3条の変更は2015年（平成27年）認定こども園ルーテル学院幼稚園設置で変更されたものとなっている。

本来「建学の精神」とは学院設立の理念に関わり、連綿と受け継がれるべきものである以上、時代とともに変遷するものではない筈である。それは「建学の精神」遂行のためのスローガンである「標語」もしかりである。

「学校法人九州ルーテル学院規則」（以下「院則」）前文で謳われる「建学の目的」の項目は一貫しては

資料2

学院聖句

わたしが来たのは、羊が命を受けるため、
しかも豊かに受けるためである。
（『ヨハネによる福音書』10:10b）

—4—

教育方針

本学院は、教会の使命として、女子の教育を全人格的に施すことを目標とし、高校卒業生に対して、キリスト教の精神にもとづく人格教育を行い、識見を高め、情操を養い、健全な身体をもって、進んで神と人へと奉仕する有為な婦人を育成する目的をもって短期大学を設立する。

児童教育学科は幼児・児童及びその教育の研究をなし、幼児・児童教育機関の職員を養成し、英語学科では英語学習の各領域を研究し、更にその実務的能力を養い、他民族との交流を容易にし、且つ兄弟愛を国際に広げる諸機関の職員を養成する。

—6—

学院標語（学訓）

感恩奉仕

学章

正三角形の各辺が丸味を帯び、えんじの地色の中に白の野バラを配し、その下にcollegeの頭文字cがある。正三角形は養育知育体育の均整の取れた教育目標を示し、各辺の丸味は女性の優しさを現わし、えんじ色は犠牲を、野バラの白は純潔を意味し、野バラはルーテル家の紋章である。



—5—

沿革

- 1926年（大正15年）4月 米国の北米一致ルーテル教会の婦人達の熱い折りと運動が実って九州女学院を5年制のキリスト教主義の女学校として開校。
- 1928年（昭和3年）10月 高等女学校令と同等の学力のあるものとして文部省の指定を受けた。
- 1943年（昭和18年）4月 高等女学校令による清水高等女学校（4年制）となる。
- 1946年（昭和21年）11月 九州女学院高等学校と校名を変更。
- 1947年（昭和22年）3月 専攻科（2年制）設置。
- 4月 九州女学院中学校設置。
- 1948年（昭和23年）4月 九州女学院幼稚園設置。
- 4月 九州女学院高等学校設置。
- 1975年（昭和50年）1月 九州女学院短期大学設立認可。
- 4月 九州女学院短期大学開学。
- 1976年（昭和51年）10月 九州女学院創立50周年記念式典挙行。
- 1985年（昭和60年）4月 九州女学院短期大学開学10周年記念式典挙行。
- 1986年（昭和61年）4月 入学定員改正（英語学科200名、児童教育学科50名）
- 4月 2号館完成。
- 10月 九州女学院創立60周年記念式典挙行。
- 1990年（平成2年）4月 九州女学院短期大学開学15周年記念式典挙行。
- 1993年（平成5年）7月 3号館、九女会館完成。

—7—

いる。

(建学の目的)

前文 「学校法人九州ルーテル学院」(以下「本法人又は本学院」という。)は、キリスト教の精神に基づく人格教育を行い、識見を高め、情操を養い、健全な身体をもって、進んで神と人々とに奉仕する有為な人に育成することを目的とする。

2 本法人は、「感恩奉仕」を校訓として掲げ、知育・徳育・体育、及びこれを支える霊育において、その教育実施に当たる。

筆者はこの項目が最も本学の「建学の精神」を顕現したものと理解していたのだが、本学院のこのような理念や目的を「建学の精神」であるとする根拠を持たなかった。あったのは先述の通り、赴任当初から学長やチャプレンから窺った記憶のみである。そうした中、「委員会」の委嘱をされ、本学院の「建学の精神」を確認する機会が得られたのは僥倖であった。

3. 「委員会」での活動

「委員会」は4月10日に第1回が招集され、その後4月24日、6月11日、7月2日、7月30日と5回開催された。内第1回については金戸が「覚書」を記していたのでここで委員会の内容を書き留めておく。

冒頭に内村委員長から「委員会」の主旨についての説明を受け、各委員が理解している「建学の精神」についての意見を述べた。金戸は2020年1月15日、ルーテル学院高校生に向けての講話資料より以下の説明をした。先述の内容と一部重複するが確認のため再述する。

「建学の精神」とは、学校設立の理念、趣旨があらわされるものであり、多くは「寄附行為」等に謳われ、各私立学校がHPなどで公開もしている。また「学院標語」とは建学の精神の具現化のために掲げられたスローガン(モットーあるいは校訓のようなもの)であるという理解を説明した。更に1990年赴任時より当時の三浦学長、門脇チャプレンより伺った建学の精神は「キリスト教の精神に基づく人格教

資料3

本学の教育理念

九州ルーテル学院大学は、学校法人九州女学院の建学の精神「感恩奉仕」に沿った全人教育の伝統を受け継ぎ、キリスト教精神に基づく文化的伝統を、豊かな国際的感覚をもって生かし、教養と実際に役立つ人間教育を基盤とし、専門芸芸の理念および技能を教育研究することを目的とする。

本学の『人文学部』では、従来の一般・基礎的な教科目と専門的教科目を2群に分けず、「基幹科目」「人間の発達関連科目」「人間の共同体関連科目」「人間の表現関連科目」から成る人文学科を構成する。これらの科目群の履修ならびに体験学習によって、ボランティア精神に生き、地域や国際社会で、人々の福祉と文化の向上に貢献できる「(人文)学士」を送り出したい。さらに、専門技量についての広い視野と識見を持ち、人間の生涯にわたる諸問題に対応して、社会各層で活躍しう人材を育成する。すなわち、卒業生たちが人文学科群を履修することによって幅広い現代教養を身につけた「地球人」として生きることが目標とするグローバルな教育を行う。

『人文学科』では、学生各自が主体的に科目を履修することによって、「個」としての自己充実形成に取り組むのと同時に、個と自文化・異文化共同体との相関的探究を深め、さらに、自分と異なるものとの「共生」を体験的に学習する、いわばグローバルな人間形成を教育目標とする。本学科の構想は、人間の総合的形成を個人・共同体・表現の3側面から捉え、その教育課程は、人間の心身の発達および援助を扱う「人間の発達」、人間を取り巻く「人間の共同体」、人間の相互理解を促す「人間の表現」によって構成され、これらの構成内容は、広く指摘されている「高等教育の弾力的大綱化」を十分考慮したものである。学士取得の段階では、いくぶん専門的な要素を加味した基礎的な教養教育を目指すことによって、四年間を通し人文学科群の柔軟な履修を可能にしている。

-4-

育」(現在「院則」前文にある)にあること。但し本学院の「寄附行為」第3条は1970年から現行のものと異動があるが経緯は不明。大学設立、黒髪乳児保育園の付属化とともに変遷したと思われる。次に短期大学学則は設立から1997年まで変更はなかった。また大学学則についても1997年より第1条変の変更はない。

次に「感恩奉仕」については、「九州ルーテル学院90年誌」⁴⁾によれば「感恩奉仕」という言葉は1934年(昭和9年)6月「九州女学院新聞第1号」が初出であり、Gratitude and Serviceをある日本人教師が「感恩奉仕」と翻訳したのが広まったと推測している。更に「感恩奉仕」を掲げたのはキリスト教学校としては1929年西南女学院が先であり、それに先立ち1922年真宗本願寺派大谷尊由「愛する同朋へ」で「感謝感恩」「社会奉仕」という言葉があることが指摘されている(第10章『「感恩奉仕」覚書』)。「感恩奉仕」が当初九州女学院の標語でなかったことは三浦義和短大元学長(当時は院長か?)「九州女学院の50年」に既に指摘されており(「九州女学院における

教育目標)、学院創設者M.エカードの言葉によれば学院の校訓と標語は「愛の奉仕」であったとされている(同)。その後1930年には「敬虔真摯」を経て「感恩奉仕」に収斂した。

次に内村院長は「九州女学院45周年誌」やマーサ・B・エカード先生に関する資料、また「創立60周年記念のいばら会記念誌」等様々な資料を紹介し、「感恩奉仕」についての理解を示した。

まず、1954年の時点で、エカード先生の考えには学院聖句であるヨハネ10:10bとともに「感恩奉仕」(英語でいうGrateful Serviceという翻訳よりもずっと美しい言葉)というスクールモットーがあった。

また古屋四朗元事務局長が作成した「九州女学院を建てた人々の思い」にもそのことが示されている。

LUTHERAN

WOMAN'S WORK (JULY1954) より

Each new student soon learns the words of John10:10. "I came that they may have life, and have it abundantly," which is the school's Golden Text. They also learn the school's motto, "Kanonhoshi," which is more beautiful than the English translation "Grateful Service." But to learn the full meaning of the words of the text and the motto is what we think of as Christian education, which at best a school can only begin in there or six years. This is Kyushu Jo Gakuin's high goal.

因みに九州学院の標語であり建学の精神でもある「敬天愛人」は最初の修学旅行の引率者が鹿児島を訪れた時に出会った西郷隆盛の言葉であった。なお初代院長遠山参良の「役に立つ善人たれ」は当初その前に「神のために」という文言があったことも説明した。

栗原委員は俵恭子評議員の証言を紹介した。

エカード先生の創設期の時から、建学の精神=感恩奉仕だったのではなく、確かどなたかがいわれた言葉が、イコール建学の精神と伝えつがれるようになった、ということはい聞いたことがあります。

また栗原委員は「職員必携」より「九州女学院教育目標および方針」にある以下の文言を紹介した。

キリスト教の精神に基づく人格教育を行う。／見識を高め、情操を養い、健全な身体をもって進んで神と人々とに奉仕する有為な夫人を育成する。

栗原委員は自身の新任研修で用いられていた上記手引きにより、これが本学院の教育理念であることを教わったと述べた。「資料4」に紹介する。

資料4

九州女学院教育目標および方針

(聖句)

私が来たのは、羊に命を得させ、

豊かに得させる為である。

(ヨハネ10:10)



(目標・方針)

キリスト教の精神に基づく人格教育を行う。

識見を高め、情操を養い、健全な身体をもって進ん

で神と人々とに奉仕する有為な婦人を育成する。

また「学院標語」については、中高の共学化の際、学院の改革委員が、「個性・共生・国際性」を教育目標として掲げたと指摘した。

また同委員から、同年3月14日付にて俵恭子評議員から受け取ったメールが紹介された。末尾に資料として添付する。

崔チャプレンからは「建学の精神、標語は長く伝えられ親しまれてきたものなので大切にしたい」旨の発言があった。

以上の話し合いからまず、ヨハネ10:10bの「学院聖句」と標語「感恩奉仕」は動かさないことを確認

した。課題は「建学の精神」をどうするかであって、これについては「院則」前文を基本に「キリスト教精神に基づく人格教育」とする案、もしくは新しく作成し、その際は学院聖句および標語との整合性をはっきりさせることが確認された。

第2回委員会は4月24日に開かれ、各委員が「建学の精神」および「学院標語」について旧職員から聞き取った内容について情報を共有した。

まず金戸は4月21日に大学旧職員の一人恵子氏から聞き取り調査をした。氏はM.エカードとともに学院創設に関われ重要な職務にあたられた牧野典次（初代事務主事）の孫にあたり、ご自身も九州女学院9回生（1950～1957年）である。インタビューにあたり、氏は同級生の岩永宣子氏を伴われ、在学時の思い出話を聞かせて下さった。

特に「建学の精神」についての記憶はないが、祖父牧野が創設時の思い出として「エカード先生と一緒に女子教育をするのだ」と語られた事を証言された。1926年創設時の重要な証言としてここに遺しておきたい。想起するのはキリスト教学校同盟第56回大学部会研究集会（2012年9月4日）での内田樹氏の講演の一節である。「キリスト教学校新聞」658号（2012年11月）に内容が抄録されているが、当日参加した金戸の講演メモから引用させていただく。

（キリスト教学校に）最初に入学を決意した人たちは、この人たちが何か、世界（明治の社会、おそらく女性として息苦しさを感じさせる社会）の外側に通じるドアを持っていることを直観したのだろう。その人たちは実定的な価値ではなく、つまりそこで何が学べるかをわかって来たのではなく、自分の知らない世界、外部に通じるドア、外の風が入ってくる窓のように思った。

どうぞいらっしゃいとドアが開いた瞬間、原風景の感動を我々は忘れてはならない。ファカルティの継続性とは、その原風景の記憶を伝えていくということではないか。⁵

内田氏の論点は、こうした「ミッションスクールの扉をおずおずと叩いた最初の日本の少女」たちに「そこで学ぶことの意味や有用性があらかじめ開示されていたからではない」ことにあったのだが、内田氏の指摘した「キリスト教学校創設の原風景」とは、たとえば2020年9月19日に再放送を終了した

NHKの朝ドラ「はね駒」（1984年4月7日～10月4日）の主人公が、「広い世界を知りたい」と反対する親を押しつけて女学校（現宮城学院女子大学をモデルとしている）に入学していく姿と重なるかもしれない。

小檜山ルイ氏によれば、「近代日本におけるキリスト教伝道事業の中で女子教育は最も大きな社会的インパクトをもったものの一つ」であり、1930年の統計によれば「日本内外のキリスト教徒は」「女子教育により多くの資源を傾注していた」⁶と指摘する。こうしたキリスト教の精神が当時の女性のような被抑圧者への解放が期待されるものであったことは想像に難くない。そうであるからこそ牧野氏の証言のように、本学院が、まずは女子教育を主眼として建てられたことは留意しなければならない。

内村委員長からは新たな資料として「九州女学院時報」第30号（1991年7月）に掲載された門脇聖子（当時短期大学チャプレン）の「ルターの教育観に思う」の紹介があった。

ルターは技術や知識の修得のみを目的とする教育施設が乱立していく中で、真実の教育は、人間の人格教育であるとの信念を強く表明し、それを貫徹していくためには、神との関係を抜きにしては考えられないとして、教育の目標を「神への奉仕」と記している点を先ずあげたい。「神への奉仕」の言葉でルターは「子供のために、その腹ばかりではなく、魂をも心にとめる」ような教育、すなわち「神への認識のうちに成長し」、「神の言葉を広め伝える若者」を教育することのみならず、広義に、どのような職業においても、神への畏敬の念をもってこの世の平和と福祉につかえるものの育成をも意味した。現在の九州女学院の教育目標「神と人ともに奉仕する有為な婦人の育成」にその精神は受け継がれているといえよう。

上記「教育目標」こそが、金戸が本学院赴任時に聞かされていた「建学の精神」に他ならない。

栗原委員は4月21日付にて旧職員の的場君矢氏からのファックスを活字化し、紹介した。その後栗原委員からいただいたメールの文言とともにこれも貴重な証言として遺し置く。

的場先生は、教育実践・授業実践においても極めて前向きな、研究熱心な方でした。そのような方でも日々

の指導に集中している中で、「建学の精神」について、在職当時学院から説明や研修があったはずの内容を、思い出せないと言われました。

資料5

的場 君矢 先生（数学科）より

*手書き、ファックスで送信されたものを、ワードで活字にしました。

2020年4月21日（火）

退職して20年、今、思い出されるのは自分の母校より、40年在職していました九州女学院の事でした。

私は江藤安純先生の面接を受けて九州女学院の教師になりましたが、一番の驚きはキリスト教を中心にした学校であり、これまでの生活とは全くかけはなれたものでした。

当時は信者の方が多く、教師としてどう働いていけばいいのか心細く感じました。教師としては、生徒の学習意欲をどう引き出していか、また、集団の中でどう生きていくか、この二つはこの学校でも問われることです。

私にはクラス担任の機会が多く、入学から卒業までのサイクルで受持つ生徒同僚、「修養会」にはよく恵まれました。しかし、生徒の域を脱することは容易ではありませんでした。

学校には、ただ「知識」をつかみ取らせるだけの働きを求めるのではなく、一つの目標に向かって「芯」となるものがあるように思います。九女でいうならそれが「建学の精神」というものでしょうか。数学の公式を覚えるものとは違います。言葉として覚えるものではなく、学校という集団の中で培われてきたものとして現れてくるものです。卒業して初めて出会えるものです。

九州女学院の教師として生きてきました中で、「建学の精神」を常に意識して生徒と対峙してきたという感覚はありませんが、教師も生徒も真面目に向き合えば必ずと見えてくるものだと思います。思わぬところで卒業生と出会うのがとても楽しみです。

2020年4月
的場 君矢

また崔チャプレンからは清重尚弘前学長からのメールが紹介された。貴重な証言なので全文は末尾に記すが、ここでは特に氏の考える「建学の精神」について記された部分を紹介する。

短い言葉に凝縮される「建学の精神」は、団体、企業体等が公にするミッション・ステイトメントに比するもので、私学の存在意義を広く社会に対して端的に表明し、かつ自らに期するもの。〈略〉建学の精神を学ぶとは、抽象的な標語を解釈、記憶するのではなく、建学した先輩の方・「建学者の精神」を学び継承することであると考えます。／建学当時の歴史的状況の只中で、あえて私学を創立しようと決断し、奮闘なさった先達のミッション精神、創造的、建設的な奉仕の精神を理解し、今にこの精神を私どもが継承し、自ら実践することこそ大切です。

清重氏の指摘された「建学者の精神」に学ぶことの大切さは、「建学の精神」の成文化を目指す委員会にとって大きな示唆を得た。また「ミッション・ステートメント」については、現在、キリスト教大学を含んだ多くの大学がそのHP等で表明をし始めてい

るところであり、委員会でも9月末までにその原案が示されればとの思いを抱かせた。

これらの得られた証言を元に、次回以降の委員会では「建学の精神」の原案づくりに入ることとなった。

なお「建学の精神」と「学院聖句」、そして「学院標語」の3つを結びつける理論化の作業の一つとして、内村委員長が「のいばら」132号（2018年7月）に掲載された「新校長あいさつ」を紹介した。

神さまの前に自らを省み、「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである」（ヨハネ10・10）の学院聖句に力づけられ、神さまと隣人に仕える「奉仕」を実践する者となること。そのことを学院での学びを通し、またその後の人生を通し目指していくことが、私たちに与えられた使命であるのです。

また栗原委員からは6月11日に、以下の試案が示された。

九州ルーテル学院が九州女学院時代から継承してきた学院標語「感恩奉仕」の背後にあるのは、学院聖句です。ここに、キリスト教を建学の理念に据えている私たちが常に立ち返るべき視点があります。／わたしたちに豊かないのちを得させてくださるといふイエス・キリストの力強い宣言を感謝をもって受け止め、その感謝の心を、他者そして社会への具体的な奉仕として表すこと。このことが、九州ルーテル学院のメンバー一人ひとりの使命（ミッション）なのです。

また学院聖句に関して崔チャプレンから、キリストの来臨にはキリストのへりくだり（謙卑）が示されているのであって、キリストにならって世に「奉仕」することが求められているとの指摘もあり、これまで「建学の精神」（設立の目標や理念）と「学院標語」との関連性に比べ、「学院聖句」の有機的な関連性がなかなかうまく結びつかなかったものが、これらの議論によって次第に深まっていった。

4. 「建学の精神」および ミッション・ステートメント案について

以上のような議論を経て、委員会は7月30日の第5回委員会にて以下の案の採択を決定した。⁷

建学の精神（案）

キリスト教の精神に基づく人格教育を行う。

識見を高め、情操を養い、愛をもって平和を実現するために、神と他者とともに進んで奉仕する人を育成する。

ミッションステートメント（案）

九州ルーテル学院は、キリスト教の精神に基づき、神を畏れ他者を愛する人格を養成すること、すなわち、ここに集うすべての者が、イエス・キリストを模範とし、学院標語である「感恩奉仕」を進んで体現する人となるよう育むことを使命とします。

なお学院聖句および学院標語はこれまで通りとするが、委員からは聖句については現在「新共同訳聖書」を用いているが日本聖書協会は「聖書協会共同訳聖書」、いのちのことば社は「聖書 新改訳2017」を既に発刊しており、今後学院が礼拝や聖書科等の授業でどの聖書を採択するかによって表記が変わることが指摘された。参考までに引用しておく。

「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである」。(現行、新共同訳)
「わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです」。(新改訳2017)
「私が来たのは、羊が命を得るため、しかも豊かに得るためである」。(共同訳)

最後に、委員会が旧職員への聞き取り調査を行おうとしていた矢先に永年短期大学のチャプレンの任にあられた門脇聖子氏の訃報を受けた。前年の10月12日には河野重昭氏が召天された。本委員会のプロジェクトがもう少し早く始まっていればもっとと有益な証言が得られたであろうことを思い残念でならない。この紙面をお借りし謹んで哀悼の意を表する。また旧中高チャプレンの石井昇氏にも連絡をとった

が闘病中でインタビューを受けられない旨の連絡を受けた。一日も早い回復を切に祈る。

注

1. 1990年度の学長は三浦義和氏、院長は河野重明氏、そしてチャプレンは門脇聖子氏であった。
2. 不詳であるが1976年頃に発行されたと推測される。
3. 2002年3月発行。
4. 2016年10月発行。
5. これは当日の講演を逐次タイプした金戸のファイルからの引用である。講演の主旨を逸脱してはいないつもりだが、正確な記録ではないことをお断りしておく。
6. 「キリスト教に基づく近代日本の女子教育再考」（「近代日本のキリスト教と女子教育」キリスト教史学会編2016年8月教文館所収）
7. 「委員会」決定案は同年9月開催の理事会にて文言等若干の訂正後決議、採択された。

主要参考文献

但し本文にて引用したものは注に記した。

- ・倉松功・近藤勝彦『キリスト教大学の新しい挑戦』1998年8月 聖学院大学出版会
- ・青山静子『マーサ・B・エカードの冒険』2006年9月 ドメス出版
- ・中村敏『日本キリスト教宣教師』2009年5月 いのちのことば社
- ・黒川知文『日本史におけるキリスト教宣教』2014年12月 教文館
- ・石川明人『キリスト教と日本人』2019年7月 ちくま新書

＊以下の資料は本文中に引用したものの他将来的な
散逸を防ぐために掲載し、後の世代の分析、検討
を請うものである。

資料6 清重尚弘「建学の精神」

建学の精神	2020.4.23 清重尚弘
短い言葉に凝縮される「建学の精神」は、団体、企業体等が公にするミッション・ステイトメントに比しうるもので、私学の存在意義を広く社会に対して端的に表明し、かつ自らに期するもの。	
これを考えるにあたって、私は、九州ルーテル学院に留かれて、14年間奉職した経験をおみつづ、3点に絞って、考えることを記します。	
I. 建学「者」の精神 建学の精神を学ぶとは、抽象的な標語を解釈、記憶するのではなく、建学した先輩の方・「建学者の精神」を学び継承することであると考えます。 建学当時の歴史的状況の只中で、あえて私学を創立しようとした決断し、奮闘なさった先達のミッション精神、創造的、建設的な偉大な精神を理解し、今にこの精神を私どもが継承し、自ら実践することこそ大切です。 建学の歴史的原点が忘れられると、学院の持つ歴史的、宣教的次元への視点が見失われてしまう恐れがあります。そうなると、時に起こる私学の「私物化」の危険が生じます。教育事業を営利事業のようにみなし、収益の増進、配分の議論に陥ってしまいます。 ルーテル（旧女学院）の建学者 E.ボーン先生をはじめ、M.エイカード先生、村上二郎先生、牧野典英先生他の方々は、無私の献身者でありました。この方々の精神・生活に学び、後に訪きたいものです。 教職員、学生生徒にとって、建学者こそは、良きモデルであります。	
II. 感恩奉仕とは 新しい生き方 この精神は、崇高な次元の教育目標で、これが自らの信条となるには、「回心＝メタノイア＝方向転換」が求められます。 なぜなら、私たち人間は、生まれながらには、自己中心、生存のための競争を本能とする者だからです。「感謝する」と「奉仕する」ことは、人間を超えたところから新たに教え導かれて、自らの内なる生きものの、自己中心主義を脱却して新しい生き方を選ぶことに他なりません。 「奉仕」は、キリストの「奉仕」を指すものです。 キリストが「私がこの世に来たのは、仕えるため」（マルコ10:43f）とある通り、他者の上に立つて支配するのではない、一言下に身を置いて奉仕するため、キリストは身をもってそんなやり、弟子たちにそのようになれと教えた通りです。これは、人間生来の欲求を克服して、自らを虚しくして、隣人に仕える道を選ぶということです。 「感恩」の反対は「忘恩」、奉仕の反対は「自己中」でしょうが、 私たち自身個人としても、また学院メンバーの関係においても「感恩奉仕」の精神が失われることが起こらないとは言えません。自ら省みつつ、またお互いに日々建学の精神を思い返し励ましあって、学院のミッションの実現に努め、また自らの人生を価値あるものにしたいものです。 従って「感恩奉仕」の精神を自らのものとするために、日々キリストの言葉に共に立ち降り、新たに上からの導きをいただいてまいりましょう。 「感恩奉仕」の精神は、日々の教育活動の内実としてはいうまでもないこと。	

III. 建学の精神「感恩奉仕」は、裏やらぬミッションの指針です。
学院総体としての精神「感恩奉仕」は、日々の我々の営みが、社会に対し感謝し恩返しするミッションとなるようにとの願いを表明するものです。
建学者のミッションが熊本で開始されて以来今日に至るまで間もなく100年、受け入れられ支えられ、立ち続けることを許されたことへの恩返しです。
1926年に極めて小さい中等女子教育機関として誕生した学院が今日、幼保から大学院まで擁する学院にまで成長しました。これは全て学院が熊本社会のニーズに応えたいと願い、決断し実行してきたミッションの結果です。学院が1世紀にも及ぶ長年にわたって熊本の皆さんから受けた恩恵、これをしっかりと、心に留めて、できることはなんでもして、恩返し（奉仕）をしようという思いで、今後とも地域社会への貢献を続けたいものです。例えば、キャンパス全部は公共の資産です。だから、例えば、キャンパス内の施設設備をお役立ていただくために、求めに応じて会場提供、また、教育研修の機会には進んで主催の役を引き受けるなど。「人助けのルーテル」「相談してみるか、ルーテルに」という評判が立つのが光栄です。
また、ルーテルが子供保育園設置に踏み切ったことや、乳児保育園の設置なども地域のニーズに答えて恩返しをとの「感恩奉仕」精神の延長上にある選択決断であると言えます。
ケネディ大統領を持ち出すまでもなく、「何をしてもらえるか」ではなく「何をすれば良いか」を自らに問うのが、責任ある自立した者のミッション精神です。これが「建学者」の精神を学び継承することでありましょう。のために、私学に身を置く者は、絶えず建学者のお働き、歴史を学び続ける喜びを共有したいものです。ミッションを担う当事者意識です。
そして、ミッションは、神ご自身の冒険であり、リスクなしには実現しない要のわざです。
したがって、建学者の精神は、あえてリスクを恐れず、乗り越えて絶えず新たな道を切り開く開拓者の精神にほかなりません。リスクを回避しようと自己保身に向かうことのないように。
いま、私も建学者の群れに加わろう、との志を日々新たにしてください。

資料7 清重尚弘 2006年大学職員対象キリスト教講話資料（参考までに掲載する。）

今日におけるミッションスクールの課題と貢献	2016.3.22	熊本の経験： 定員確保、大学院、長期履修制度、二学科体制 保育士、幼稚園教諭、小学校教員免許 保育事業（認定こども園、付属乳児保育園）ジェニス 80周年記念、90周年記念事業
序 ミッションとは 1.映画「ミッション」(1986 英国) デニロ、パラグワイ先住民への伝道 2.mitto(投げる、派遣する)→missio(派遣、使命) →mission (伝道会社) missionary 宣教師 3.ミッションスクール＝外国の伝道団体が設立経営する学校 4.なぜ学校？ 教育＝隣人愛、新社会建設の人材養成（リーダーシップ） フェリス女学院(1870 年明治 3 年) アメリカ改革派 ME キダ女史、居留地のへボン施設所で女子教育開始。 モットー「他者のため For Others」。 青山、立教、同志社、明治学院、西南学院、関西学院、上智、聖心女学院、活水九州学院（1911） 九州女学院（1925 年）		
I. ミッションに携わるとは？ 1.原点 イエスの弟子達：ガリラヤ湖畔で「私についてきなさい」 綱。父を捨てて 全面的信頼 2.Call/Beruf 第一の Call、第二の Call ゲスト/ホスト “スチュアード（善き家令）神学” 3.私の場合：召命・・・九女の第一印象：38 歳で「いいなあ」→ 62 歳で実現 前歴：1968 年～開拓伝道、土地購入、会堂建築 ドウキンズ宣教師との出会い 1972～75 年留学、貧困の体験 1975 年～神学校（大学）学長（24 年間） 2002 年 本学から招聘(前田理事長への恩返し) ＊ 前田先生：ルーテル教会の最強のリーダー 1970 年代の自立を達成 収益事業（東京、大阪）、経済自立計画立案・達成、牧師給与体系確立、 神学校自立態勢、九女共学化、短大の四大化。 アメリカ教会の驚き！ 着任：本田伝喜先生の杖を持って「衣鉢を継ぐ」 移住の経験：謙遜を学び直せ！ 戦友は？→ 団体戦に持ち込んで勝利する 学内ヒヤリング、同窓会、学外団体・組織に参加 熊本の人脈重視の文化 寄付への協力		
II. ミッションナリー心得：三鷹の経験から 1.たのしく (en-joy)「いつも喜んでいなさい」（テサロニケ第一 5:16） 人生＝神様のプレゼント 喜んで受ける「笑う門には」N カズンズ「笑いと治癒力」 F.Hebbel 19 世紀独詩人、劇作家。人生は何か？ → 何かをする為のチャンス チャンス＝チャレンジ/リスク チャンスを：待つ、逃がす、自分で作り出す 2.ホンキで（当事者意識）再建の危機に「当事者能力がないんだから」 矢印は自分へ、所為にするな！（ヒト、シャカイ、ジダイ） ホンキでなければ楽しくない 3.皆で（団体戦に持ち込む）、 Together in God's Mission “学院は一つ”		
III. ミッション（スクール）の歴史 1.キリストの命令：マタイ 28 年“キリストの大作令” キリスト教の歴史＝ミッションの歴史、地中海世界→ヨーロッパ(十字軍) →宗教改革/Counter Reformation →大航海時代（新）大陸 AA → ミッションナリー来日は 16 世紀キリスト教、19 世紀の開国、 20 世紀の敗戦後 2.熊本の場合 ジェーンズ、同志社へ 3.日本教会の自律へ → “キリスト教学校” 同盟に 100 校加盟 大学生数 24 万、 中高小 10 万、教員大学 4,500、中高小 1,000 + ローマカトリック学校		
IV. 本学院のミッションの歴史 日本のルーテル教会の場合：依存から自律へ 諸活動の財政 変遷 1892 年開始 1960 年代の自立へ 本学の場合：US の全面的支援→戦中の途絶 → 戦後の支援 自立への遅い歩み 依存体質（当事者意識希薄）と克服の課題 leadership とは？		
IV. ミッシォ・デイの神学 1.D.ボッシュ「ミッションのパラダイム転換」（1991） “ミッションの主体は神、それに教会が含まれるのだ” 世界への神の愛が迫る、これがミッシォン、世界のあるがままに多様であり、人間の様々な思いに遥かに先立って進む。ミッションは教会も、クリスチャンも、これを占有するものではない。 ミッションのアジェンダを決定するのはクリスチャンではない、教会でもない、ミッションスクールでもない、世界、世界の人々がこれを求め、要請する。 「他者のために」→「他者とともに」cf.黒瀬乳児保育園、認定こども園 ＊母の訴えが本学のアジェンダを決める ELCA「21 世紀のミッション」Accompaniment 2.K.ラーナーの包括思想「無名のキリスト者 Anonymous Christian」 Christianize→Missionarize ミッションを担う者へ 3.抱きに応えよ！ キリストに従い働き マタイ 16 章 ベテロの信仰 →受難を謙れたー「サタンよ 引っ込んでろ」 ヨハネ 8 章 17 節「私の父は今もなお働いておられる。だから、私も働くのだ」		
V. 言い残すこと 前へ前へ 「泣きながらも 前へ」 ミッション＝自己実現（マーズロウ） M テラサ 自ら変わる者であれ M.エカード「バラは使命で咲いているから、寒くないの」 “よそ坊主”と“地侍”の“一所懸命”		

資料8 依評議員の証言

2020/3/14 印刷

Subject: Fw: Re: 九女 ルーテル学院の建学の精神について
 From: [REDACTED]
 To: [REDACTED]
 Date: 2020/3/14, Sat 06:06

iPhoneからP Cへ 栗原

--- Forwarded Message ---

栗原様

> 返信遅くなりました。すみません。

>

> 大きなミッションですね。でも先生にふさわしいミッションだと思います。頑張ってください。

> 内村先生から、前回の評議員会で（私は理事でなく一評議員にすぎません）「100周年に向けて建学の精神を今一度振り返り、これからの100年への歩みを進めていく上でのより強力な基盤となりうるものにしていきたい」、というようなご発言を伺いました。先生おひとりで考えられるのは大変だから、教職員、学生全員を巻き込んで一緒にルーテルの建学精神をどう思うか、これからの教育にかける夢や期待するものなど自由に考えて話し合う機会をつくれるというのでは、と思いますしたが、発言はしませんでした。もう一つ、100年を機に歴史資料室をぜひきちんと充実させていただきたいと思っています。

>

> エカード先生の創設期の時から、建学の精神＝感恩奉仕だったのではなく、確かなたがいわれた言葉が、イコール建学の精神と伝えられるようになった、ということは聞いたことがあります。その経緯をもう一度調べなおしてみる必要はあるかもしれませんね。たぶん感恩奉仕の精神をたどると、創設に携わったエカード先生はじめ初期の先生方が、女子教育にかけたヴィジョン（建学の精神）にいきつくのだらうとは思いますが、ヨハネ3章16節、神はその独り子を給うほどにこの世を愛された。それは御子を信じる者が一人も滅びないで永遠の命をえるためである。）学校

> の趣句にもなっている10章10節 私が来たのは羊に命を得させ、しかも豊かに得させるためである。一人一人が神様に愛されている存在であり、そのことに気づいて感謝して、与えられたかけがえのない命を豊かに、世のため人のために用いて生きるものになってほしい、という熱い思いが、教育の原動力になっていたと思います。私が中学に入ったころは、平井清先生、ハドル先生、一門美野先生、福岡先生、江藤安純先生など結構多くのクリスチャンの先生がいらして、礼拝でも先生方がメッセージをされ修養会等では結構親密に突っ込んだ話し合い等もあり、そうした環境の中で私は自然に聖書の感化を受けたように思います。

> クリスチャンになっている同期の友人は、それでも多くはありませんが、共通していることは、みなとても元気で明るく、人づきあいがよく向上心もあり、人のために無私の精神で動く人が多いということです。簡単に言うと、結構感恩奉仕の精神が身についているように思います。

>

> 5年前にガンでなくなった私の親友は、女学院中学1年の時のクラスメートで、お父さんの

2020/3/14 印刷

転動のため、たった一年間だけ一緒だったのですが、家族ぐるみで一生行き来するほどの友人になりました。創意工夫のある人でモノづくり、アート、料理などに力けた、謙虚で思いやりの深いやさしい人でした。なくなる前に、今度はもうだめだわという電話がかかってきて、福岡まで飛んで会いに行きました。クリスチャンではなかったのですが、どうも仏式で葬儀をしてもらうのは自分らしくない、キリスト教で送られたいけど、どうしたらいいかという相談を受けました。子どもさんたちが皆お世話になったカトリック系幼稚園の園長先生が自分がクリスチャンになるのをずっと祈っていてくれたんだけどこののをきいて、その方にすぐ神父さんに在宅で洗礼をしてくださるよう手配をおねがいして帰りました。5日後に彼女は洗礼を受けてその10日後に息を引き取り、カトリック教会で心のごもったとてもいい葬儀で送られました。今、彼女のご夫君と子どもさん、お孫さんたちみんなその教会の神父さんと親しくなり礼拝に集われています。とても個人的なエピソードですが、私はこのことだけでも女学院で中学から教育を受けたことを大変幸せに思っています。

> い

> 問題は、受け継がれてきている建学の精神、感恩奉仕の心が、この変化の大きい、グローバル化が進むこれからの時代に生まれ育っていく子どもたちを導く教育の土台、また指針としての力を十分発揮していくものとしていかなければならないということ、そのためにどうすればいいか、ということなんだと思います。

> 今まさにコロナウィルスの世界的流行が、現代と未来の問題を人類に突き付けていると思います。現代の人は、便利さ、効率、スピード、快適さ、身の安全と幸福を求めるあまりに、地球温暖化や経済格差、貧困などの問題を生み出しています。この度の感染症拡大はたちまち世界規模の経済悪化を招き、人々の日常生活まで被害が及んでいます。何が起きても人類は今や運命共同体、みな互いに影響をこうむってしまいます。また競争社会、自分ファーストの価値観は、差別や偏見を生み出し、人々の生きる力を奪います。今回のコロナ旋風は、今の社会の在り方に警笛を鳴らしているように思います。弱者への共感力、様々な苦しみへの想像力、いのちと人権を大切にすることの価値観を大切にしたいと思います。SDGsが目指している、だれ一人も取り残されることのない社会を、積極的につくっていく心と智慧、必要なスキルを持った人間を育て、これからのルーテルの教育を望みます。聖書の学び、社会の課題に気づき、問題解決の力を養う教育、自己肯定感を高め他者への想像力と思いやりを育てる教育、コミュニケーション力を伸ばす教育、など具体的なカリキュラムの中に取り入れていただけたらと思います。一言でいうと、善きサマリヤ人教育？でしょうか。

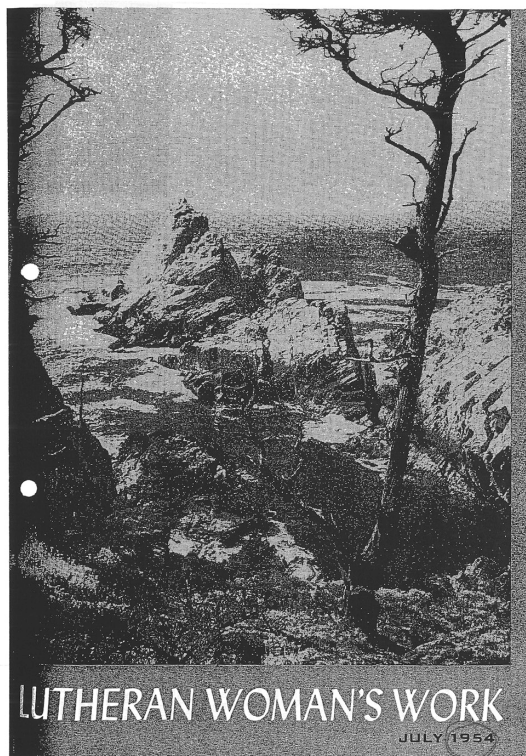
>

> 以上、先生のご期待に応えるようなことは何も書けてないと思いますが、とりあえずのお返事とさせていただきます。 依藤子

>



資料9 Lutheran Woman's Work July 1954 (資料10の表紙)



資料10 エカードによる「標語」の解説

Kyushu Jo Gakuin— Goal and Course

By Martha Akard

GRADUATES of Kyushu Jo Gakuin call themselves "The Wild Rose Association" because they love the school's emblem which they have worn as a badge while students. This emblem is an adaptation of Luther's coat-of-arms—triangular in shape, as a constant reminder of the physical, mental, and spiritual sides of our makeup, and our responsibility for their harmonious development. In the center is a wild rose. Of course it symbolizes purity, beauty, life, and growth. This rose is set on a red background which is symbolic of sacrifice—Christ's first, and ours, too, if we would follow him.

Each new student soon learns the words of John 10:10, "I came that they may have life, and have it abundantly," which is the school's Golden Text. They also learn the school's motto, "Kanonhoshi," which is more beautiful than the English translation "Grateful Service." But to learn the full meaning of the words of the text and the motto is what we think of as Christian education, which at best a school can only begin in three or six years. This is Kyushu Jo Gakuin's high goal.

To attain this goal the first requisite is developing Christian teachers, and great emphasis has been placed upon it. While some non-Christian teachers are engaged from year to year, they have, with few exceptions, been won to Christ sooner or later. And Christian teachers are continually stimulated and nourished through natural Christian fellowship with one another in their joys and problems; in their brief morning prayers together before beginning the work of the day; and through the rich daily worship of the



whole school, in which Christian teachers take turns leading.

The whole faculty organized itself last fall into three groups for Bible study and discussion under the leadership of the principal, the chaplain, and a missionary. This study is continuing during the new school year. We are planning to have a Faculty Retreat at the Y.M.C.A. Camp on Mt. Aso for two days after school closes for summer vacation. There will probably be a lecture on Christian education, Bible study, and prayer with much discussion of practical problems from the Christian education standpoint. With such a faculty, it is no wonder outsiders often say they feel a "different atmosphere" when they come into the school. I believe God has been answering the prayers of you intercessors throughout the years.

The course toward the goal? A faculty committee of seven, whose responsibility it is to plan and integrate this Christian training, is called "The Religious Education Committee." It is appointed by the principal, who, of course, is a member ex officio. Miss Kawagiri is our chairman. Mr. Eto, Head Teacher, Chaplain Tsuboike, Miss Huddle, English teacher, Mr. T. Miura, Science teacher, and I, are the other members. We plan the curricular Bible course and five of us teach it. We also pro-

(Continued on next page)

July, 1954

11

*以下は内村委員長が蒐集、整理した資料である。こちらで体系的に編集しなければならないところではあったが今回はそのまま転載する。

「感恩奉仕」

・淑徳巣鴨中学高等学校

感恩奉仕で、共に生きる

「感恩」は、今日の自分が他の多くの恩を受けて生かされていることに対する感謝の心を表すこと。「奉仕」は、他の恩恵によって今日ある自分を他のために役立てていくこと。仲間と感動を共有し、誰にでも感謝できる「おかげさまの心」を身につけ、共に生きる力を養っています。また、どこでも誰からも信頼されるリーダーシップを発揮できる人材を育てて行きます。

「おかげさま」の心で日々を過ごしています。

朝は生徒（生徒会役員と各部活動の部員が正門前に並び、登校する生徒や仕事に向かう社会人の方々に対し、大きな声で挨拶をします。

・西南女学院

本学院の基督教に基づく女子教育は、創設時に校訓「感恩奉仕」を掲げて営まれてきました。この「感恩奉仕」は今日、西南女学院の「建学の精神」となっています。神の恩寵（おんちょう・恵みの意味）の中に生かされていることへの感謝を意味する「感恩」と、隣人への愛を意味する「奉仕」を教育の基盤とする教育によって、本学院は多くの優秀な人材を社会に送り出し、地域社会にその名を知られるようになりました。

〈奉仕 ministration, service〉は、報酬を求めず、また他の見返りを要求するのでもなく、無私の労働を行うこと。

往々にしてその根拠となる土台には宗教的な信念や、宗教的な意味合いの神奉仕のかたちとして、神ではないもののその代わりとしての、困難な場面におかれている隣人に手を差し伸べ、出来る限りの援助を与えるというケースがある。その場合の隣人とは、同じ信仰、たとえば基督教の信仰を持つ信徒仲間に限られることもあるし、また十字架を背負わされてゴルゴダの丘に向かう途中のイエスの頭の汗をぬぐったナザレ人のように、同じ信仰を持たない人を含めていわれることもある。

英語ではservice、ドイツ語ではder Dienstというが、それぞれ一般的な「勤め、業務」の他に、狭義で「神奉仕」の意

味を持ち、隣人や困窮者への援助、奉仕がそのまま神奉仕につながるという意味合いで用いられる。基督教ではこのような考え方は、5～6世紀のヌルシアのベネディクトゥスの修道会会則以来、教えの中に入ってきたものと言われている。カトリックの各修道会では、活発な活動の一つに奉仕がある。（例：トラピスト修道院のオリジナルクッキー作り、映画『禁じられた遊び』や映画『サウンド・オブ・ミュージック』、映画『汚れなき悪戯』の中でも、修道士や修道女が奉仕している姿が描写されている）

奉仕の活動をする団体、協会などは、こうした宗教的な背景を持つものは少ない。早稲田奉仕団、赤十字奉仕団、日本基督教海外医療協力会など、神道や仏教などでも、同様に宗教的な使命感、信仰の証としても奉仕の活動が行われている。そのため、信徒が団体を組んで総本山や総本社などの清掃奉仕にでかけることを「ご奉仕」という呼び方をするところがある。また皇居の掃除を行う「奉仕団」もいる。（Wikipediaより）

九州ルーテル学院（旧九州女学院）関係の人名、語句

◇ルーテル教会・・・1517年マルチン・ルーテルの宗教改革によってドイツにできたプロテスタント最古最大の歴史的教会で、スカンジナビア諸国では国教となっている。

信条に関する論争の結果、現在20教派に分かれているが、日本福音ルーテル教会は合同教会である。

日本での宣教の歴史は1892（明治25）年北米一致ルーテル教会のシェーラー・ピーリー両氏の来日に始まる。両氏により、翌年4月2日（イースター）、当時最も宣教困難とされていた佐賀市で日本最初の礼拝が守られて以来、九州を中心として、逐次関西から関東へと教勢を伸ばし、日本福音ルーテル教会を組織した。（基督教大事典）

◇南部一致ルーテル教会（The United Synod of the Evangelical Lutheran Church in the South）

・・・1886（明治19）年に、南部ジェネラル教会（The General Synod, South）、ホルンストン教会（The Holston Synod）及びテネシー教会（Tennessee Synod）が合同して作られた。

◇日本伝道の開始・・・1888（明治21）年、バージニアにリー・リチャードソンという女子学生がいて、病気になり、召天する時に遺言として、5ドルを差出し、日本に宣教師を送る費用に用いて欲しいと申し出た。これをもとに南部一致ルーテル教会は3千ドルの資金を集め、日本宣教に赴く人材を募集した。バージニアのJ・I・グッドマンという青年

がこれに応じ、準備のために神学と医学を研究し始めたが、事情で目的を果たすことができなかった。

次に南部一致ルーテル教会外国伝道局は、1891(明治24)年、ジョージア州アウグスタで会合し、ジェームズ・A・B・シェーラーとロバート・B・ピーリーの献身を報告した。

◇ジェームズ・A・B・シェーラー (James Augustin Brown Scherer, 1870. 5. 22～1955)

1870年にアメリカ・ノースカロライナ州サリスバリーで誕生。ロアノーク・カレッジを卒業し、1891年に按手札を受けて、1892年2月に最初の日本派遣宣教師としてルーテル南部一致教会から派遣された。日本では築地で伝道を始めた。植村正久の義兄山内量平が日本語教師となった。シェーラーが佐賀で伝道することになると、山内一家も同行した。1893年4月2日佐賀で最初のイースター礼拝を行った。それが、佐賀十字教会(現、日本福音ルーテル佐賀教会)と呼ばれる教会となる。1896年には2番目の宣教師R・B・ピーリーが来日。山内から日本語を習った。

1897年に体調を崩して、アメリカに帰国した。帰国後は著作活動、講演活動をして日本の紹介に努めた。

◇ロバート・B・ピーリー (Rufus Benton Peery, 1868・4・8～1934・10・25)

バージニア州パークス・ガーデンに誕生。父方も母方のルーテル派の著名な聖職者の家系である。ロアノーク大学を卒業し按手札を受けて、1892年11月23日に来日。先に赴任していたジェームズ・シェーラーと協力者の山内量平と出会い、協力して佐賀県の佐賀十字教会で伝道を始める。日本に11年間滞在し、1903年にアメリカに帰国する。帰国後はペンシルバニア州、コロラド州、イリノイ州、オハイオ州、ノースカロライナ州などで牧師と大学の教師を務める。ノースカロライナ州のラインで召天。

◇熊本宣教と九州学院…熊本の宣教は、5年後の1898(明治31)年に始まった。1908(明治41)年9月には、上級学校への進学準備を目指した「熊本高等予備学校」が設立され、さらに翌年9月、牧師養成のための「福音路帖神学校」が開校。神学校の校長となったC・L・ブラウンは、同時に九州学院設立の準備も進めた。

11月には、熊本市外大江村本に約1万坪を購入し、九州学院用地とした。1911(明治44)年4月、九州学院は中学校として開校し、校長には第五高等学校教授遠山参良を迎え、村上二郎、E・T・ホールン、牧野典次、三浦冢らがスタッフに加わった。村上以下4名は、後の九州女学院設立

に当って、大きな力となる。

◇婦人宣教師…1911(明治44)年南部一致ルーテル教会は、婦人の海外宣教について論じ、翌年2人の婦人宣教師を日本へ送る決定をした。

1914(大正3)年、マーサ・B・エカード及びM・L・パウズを東京の日本語学校に入学させた。エカードは最初佐賀で働いたが、1916(大正5)年博多へ移り、バイブルクラスや国立病院の看護婦の仕事をし、また幼稚園を開いた。幼稚園で幼児教育に当たりながら、信仰と教育のある若い助け手の必要性を感じた。

1900(明治33)年、宣教師の夫と共に佐賀に赴任したC・K・リッパード夫人は、2年後、ルーテル教会最初の幼稚園を佐賀に開き、また8年後に2つ目の幼稚園を小城に開いた。彼女もまた、共に働いてくれる若い婦人と、それを育てる学校の必要性を感じた。

1918(大正7)年、モード・A・パウラス(慈愛園創立者)続いて翌年、妹のエーネ・パウラスが来日。同じように、女性の同労者を養成する教育機関の出現を望む。

◇石松量蔵(イシマツリョウゾウ、1888年9月28日～1974年4月23日)

1888年に福岡県鐘崎(現宗像市)に生まれる。生まれつき盲目であったために義太夫を学んで芸道をするようになったが、独学で盲啞学校教師になった。

佐賀ルーテル教会でキリスト教に入信して、献身する。九州学院神学部で神学を学ぶ。九州学院で最初に受け入れた全盲の学生だった。戦後、日本福音ルーテル教会の牧師として熊本、横浜市、広島市、東京都羽村市の教会で働いた。

年譜

1888年9月28日 福岡県鐘崎で生まれる。

1900年 母の勧めで三味線を習い始める。これ以降、日本音曲の世界に入る。

1907年 鍼灸マッサージ師免許を取得し(これ以前から日本盲人会に入会し、内村鑑三やヘレン・ケラーの著書を点字で読むようになる)

1908年～1910年 佐賀県盲啞学校の鍼灸マッサージ教師を務める。この時から日本音曲の世界から離れる。

1911年10月 熊本の九州学院神学部(ルーテル神学校)に第1期生として入学

1916年6月 同校を卒業

1916年 早稲田大学文学部哲学科の聴講生になる。平方龍男や中村京太郎と友情を結ぶ。

1918年 熊本福音ルーテル教会の牧師となる。
 1925年 『盲人心理の研究』を自費出版する。
 1928年 ロサンゼルスの世界日曜学校大会に出席
 1948年 熊本県の児童福祉委員となる。
 1950年 熊本県福祉審議会委員となる。
 1951年 全国社会事業協会により功労者として表彰される。
 日本盲人キリスト教伝道協議会の副議長となる。
 1953年以降、横浜、広島、保谷市、羽村の各教会で牧会生活をする。
 1965年 自伝『盲目の恩寵』を出版する。
 1969年 牧師を引退し、大阪府四条畷の隠退牧師寮ルーテルホームに住む
 1974年 4月23日 86歳で召天

◇エドワード・T・ホールン (Rev Edward Traill Horn Jr. D. D) 1887 (明治20) 年9月23日、サウスカロライナ州チャールストンで誕生。厳父のホールン博士は、南部一致ルーテル教会の初代の海外伝道局長で、特に日本宣教に熱心であり、愛弟子シェラー、ピーリーを最初の宣教師として送った。ホールンは、アレントウンのミュンヘンベルグ大学を1907 (明治40) 年に卒業した。またエール大学院に1年学んだ後、ルーテル神学校に入学し、1911 (明治44) 年卒業した。

その年、日本伝道の任命を受け、11月3日、日本へ到着した。1912 (明治45) 年九州学院への任命を受け、熊本へ移った。九州学院に於いては、英語を、また神学部では旧約聖書を教えた。

1923 (大正12) 年九州女学院設立のために、推進委員に選ばれ、エカードらと共に働いた。引き続き九州女学院建築委員長となり、九州女学院創立まで果たした努力は高く評価されている。

九州女学院の設立が無事終わると、その年、日本ルーテル神学専門学校教授に選ばれ、九州学院を辞して、東京に移った。1929 (昭和4) 年第2代日本ルーテル神学専門学校長に任命された。

性格は豪放磊落で、しかも学識に富み、まさしく父ホールン博士の衣鉢を継ぐ人物であった。

◇三浦冢・・・1886 (明治19) 年9月7日、福岡県久留米市で誕生。紡績会社の社員の時、同社のウラジオストク勤務についたが、凍傷が原因で片足切断という病気にかかり、帰国して入院生活を送った。その時見舞いに来た宣教師が、幼い時、ヤソ嫌いで石を投げた相手のウィンテルであった。三浦はウィンテルによって道を開かれ、1910 (明治43) 年

4月、開校して間もない路帖神学校第2期生として入学した。

2年後に同校を卒業、下関の伝道に赴いたが、留学の任命を受け、1920 (大正9) 年ペンシルヴァニア州ゲチスバーグ・ルーテル神学校に入学し、また、ボルチモア市ジョン・ホプキンス大学にも学び、3年後帰国した。帰国後、九州学院神学部教授となり、熊本に転居した。彼がホールンと共に九州女学院の建築委員を受けたのは、この九州学院時代である。

後、日本ルーテル神学専門学校長を経て、昭和21年、くしくも、九州女学院第3代院長となる。

◇マーサ・B・エカード (Miss Martha B Akard) 1887 (明治20) 年4月17日、テネシー州グランドヴィル近郊に誕生。1906 (明治39) 年マリオン大学卒。ワシントン市の保育専門学校に入学し、1910 (明治43) 年同校を卒業し、メリーランド州ボルチモア市で幼稚園の保母を勤めながら、さらにルーテル教会の女子伝道学校に学んで、2年間聖書と宗教教育に励み、1913 (大正2) 年に同校を卒業、ワシントン市で慈善事業に従事した。

同年 (大正2) 年11月日本宣教の任命を受け、翌1914 (大正3) 年1月25日に来日した。

東京で2年間日本語を学び、その後佐賀教会で保育事業に当り、1917 (大正6) 年1月博多に移った。ここでは南博幼稚園を助け、翌年園長となり、後に全九州の保育買に声価を高めるに至った基礎を固めた。

1924 (大正13) 年九州女学院設立にあたり、北米一致ルーテル教会婦人会伝道局より院長の命を受け、学校教育研究の目的で帰米。オハイオ州スプリングフィールド市ウィッテンベルグ大学の研究科で学んだ。翌年、同大学より「マスター・オブ・アーツ」の学位を受け、10月帰日。設立者として、九州女学院設立にあたった。

◇村上二郎・・・1882 (明治15) 年10月27日生まれ。1937 (1904) 年明治学院に入学。5年後同高等部を卒業した。卒業の年9月に路帖神学校予科に迎えられ、英語と歴史を担当した。1911 (明治44) 年7月、九州学院より任命されて英語、英文学の研究と、学事視察のため3年間留学した。

バージニア州セーラム市ローノーク大学文学部に学び、後、最後の1年間はアメリカの各地を視察した。

1914 (大正3) 年に帰国し、九州学院において英語の教鞭をとった。

1924 (大正13) 年7月九州女学院創立のため、研究と視察のため留学する。再びローノーク大学に1年間学び、バ

チェラー・オブ・アーツの学位を受ける。後の1年をイギリスに渡り、教育の視察をし、1925（大正14）年9月帰国した。

16年ほど前、ブラウンらと共に九州学院創立に貢献したが、おそらくその時の手腕を買われて、今度はエカードらと力を合わせて九州女学院設立を任されることになったのであろう。

◇牧野典次・・・1871（明治4）年12月30日熊本県鹿本郡吉松村に生まれる。早稲田大学英文科を卒業し、さらに青山学院において神学を修めた。九州学院神学部において教鞭をとり、また、九州学院において事務・教務の任にあたった。

1925（大正14）年九州女学院設立にあたって招かれ、早速、折から建設中の建物などの監督にあたった。設立後は初代の事務主事（会計）として、学識と教養にあいまって、その任務に忠実なことが、まわりの信頼を高めた。

建学の精神検討委員会 2020. 7.

『マーサ・B・エカードの冒険』青山静子より）

□エカード先生が影響を受けたマリオンカレッジの目標「マリオンの理想」

見かけではなく、真実を重んじ、過去の伝統の最高のものを大切にしながら、現在の新しい発見や未来への希望を受け入れなさい。まことの知識に自由を、日々の生活のありふれたことに美しさを、愛と友情に喜びを、建設的な奉仕に強さを見出しなさい。楽しく遊び、真面目に勉強しなさい。神さまと神さまの子どもたちを信じなさい。奉仕がもっとも必要なところで奉仕をしなさい。

※この「マリオンの理想」は、後にマーサが創設する女子学校のモットーの基礎となる考え方が見られる。また、マーサの日常的な考え方にも共通点が多く、奉仕が大きな影響を与えたと思われる。

□女子学校設立の動機

①1921年、ニューヨーク州のバッファロー市で行われた北米一致ルーテル教会婦人伝道局の総会で、日本における女子学校設立の決議。

→もともとこの「日本の女子学校設立」のための希望は、日本に独身女性宣教師派遣の前からあり、1908年に「そのための最初の献金がペンシルヴェニア州のインマヌエル教会の婦人たちより捧げられた。（おそらく、他のキリスト教派が次々と女子学校を創設する話に刺激を受けて）

②USS伝道局主事のホーランド博士（Dr. Robert建設）C. Holand 1915年没）の「日本に男子中学校建設」の夢が1911年4月15日に九州学院として実現した時から起こっていた。

③日本で伝道活動を行っている女性宣教師たちからも。

- ・リップード夫人・・・1900年宣教師の夫と共に赴任し、佐賀に1902年ルーテル教会最初の幼稚園を開き、09年には佐賀の小城に2つ目の幼稚園を開いたが、その働き手の若い女性を育てる学校を必要とした。
- ・エカード・・・1914年来日、幼稚園で幼児教育にあたりながら、信仰と教育のある若い女性を育てる学校を必要とした。
- ・モード・パウラス・・・1918年29歳で来日。娼婦救済ホーム・孤児養育ホーム。老人ホームの慈愛園を創立した。翌年来日し姉を助けた妹エーネも女性の働き手を求めた。

◆この3人の女性宣教師たちが、女子中等教育機関の設立を婦人伝道局に願い出た。

1921年3月号「ルーテル婦人宣教師」誌・・・エカードが女子学校の設立の請願の記事。

「私どもは、みなさまに何度も女子学校がないので、困難な思いをしていることをお伝えいたしました。訓練を受けた奉仕者を得ることは不可能ですし、新たに女性たちを訓練していくことも不可能です。私たちの学校を設立し、そのなかから選んで、クリスチャンの奉仕を行なう人材を養成していく方法しかありません。」

◆1922年『ルーテル婦人宣教師』1月号「日本の女性」（ルース・C・クヌーテン）

「日本人の本当のクリスチャン女性を見てみましょう。普通の日本人の女性とは随分違っています。

目に輝きがありますし、顔には微笑みがあり、私たちですら自らを恥じるような神様への強い信仰があります。クリスチャンであるがゆえに苦しまなければならないことありますが、彼女は進んで苦しみを受けます。家族でたった一人のクリスチャンの場合もあります。それでも、信仰を失いません。夫に離婚すると言われたり、子どもを取り上げると言われたりすれば、多くの人たちが信仰をあきらめますが、彼女は信仰を捨てません。彼女は、天を仰ぎ、神様に慰めを乞い、神様の導きによってのみ、前進できることを神様に伝えます。

彼女の生活は悲しみと哀れさに満ちていますが、どうしてこんなに美しいのでしょうか。こうした日本の状況を変えることができるのは、イエス・キリストのみなのです。キリストの精神と福音の光が日本という国に感じられるようになったときのみなのです。そのときになれば、私たち

が見てきた日本の女性たちの全体像は変わっていくのです。少女のころ、若い娘のころ、中年女性のころ、最後に、老女のころの全体像は、現在みられるような冬を思わせる悲しい色ではなくて、春の喜びの色に塗り替えられるのです。イエス・キリストが、どうぞ、日本のすべての女性たちに訪れますように。

□女子学校設立準備

1923年『ルーテル婦人宣教師』誌9月号 エカードの報告

1923年6月1日 福岡・熊本

女子学校設立キャンペーン冊子の入った小包が昨日私の手元に届きました。それを読みながら、私の心はうれしさと飛び跳ねました。どのページにも、私たちがこれまで繰り返し伝えてきた「女子学校を設立する必要があります」というお願いを受入れてくださる返答があったからです。「私たちはできます、やっています」——いまでは、こうした言葉を私たちのアメリカの何千という同胞も口にくささっていますね。これらの言葉は「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる」といわれる神様への信仰に満ちた気持ちから湧き上がってきています。

□女子学校の最初の提案プラン（1823年頃） ロッテ・ワイズ・ノーマン

幼稚園を卒園し、小学校を終えると、女の子たちは女学校を選ばなければなりません。こここそ、私たちの教会にとって大きな機会の一つであるのです。私たちが提案している女子学校は、リッパード夫人が述べているように、単に日本の少女たちを教育するだけではありません。今日の日本では教育はブームになっていますので、私たちは日本の子どもたちの読み書き能力の向上を問題にする必要はないのです。

一、女子学校は本質的にキリスト教義学校であること。私たちは学校のチャペルがまず最初にキャンパスに建設されるべきであると考えます。

二、女子学校はもっとも大事な聖書研究科を設けること。この科において、生徒たちは聖書の教師として、日本各地に神の言葉を伝える奉仕にでかけられるように訓練を行なう。

三、女子学校は幼稚園師範科を設け、キリスト教宣教の任務につくよう指導を行なう。この科は、九州で唯一の幼稚園師範科となるであろう。ほかに幼稚園師範科を設置している学校は、もっとも近くて500マイル離れた本州の大阪にしかない。（九州では、活水女学校で、1905年に、

シカゴ幼稚園大学を卒業し、園長の経験を持つメリー・A・コーディーが着任し、九州で最初の幼稚園保育養成所が設けられた。）

四、女子学校は明確なルーテル教会教育を行ない、日曜学校の教師、バイブル・ウーマン、幼稚園教諭、そして、救済ワーカーを育成していくこと。

五、女子学校には優れた音楽科を設けること。日本では現在音楽が流行している。富裕階級の少女たちを迎え、女子学校のあたたかいキリスト教の雰囲気の中に導き、宗教音楽に触れる機会を与え、優れた音楽教育を与えることにより彼女たちの家庭に宗教音楽を取り入れていくことが可能であると思われる。（後略）

□エカードの献堂式でのあいさつ 1926年5月4日午後2時半から

「日本に1日も早く神の国が実現すること、また、キリスト教教育により、神の国のために喜んで奉仕を行なう人間を育成することを、朗々と説いた。」

◆（前略）…しからば、何がこの教育の大目的、すなわち、現今の社会に最も必要な点であるかと言うと、私どもの考えでは、神の国をこの世に1日も早く実現することです。ごぞいます。（中略）実に、キリスト教教育の勉むるところは、生徒を向上発達せしめ、彼らをして、真理を知ること、知識の絶頂とし、信仰をそのもっとも大切なる態度となし、祈禱をそのもっとも強い習慣とし、キリストを模範として、奉仕をすべての技能の最高点とするような人とならしむるのにほかならぬのでごぞいます。（中略）言葉を変えて申しますならば、（中略）キリストの心を心とし、その御足跡を踏んでいく人物を養成することです。これは、私ども学校として大なる責任であり、また、誇らしい特権であって、今日この建物を神に捧ぐとともに、私ども関係者一同、全身全霊を新たに捧げて御用をつとめたいと存じます。（後略）

□引退の1年前の1954年エカードは『ルーテル婦人宣教師』7月号に最後の女子学校の報告記事を書いている。

九州女学院の目標と進路

九州女学院の卒業生の会は「のいばら会」と申します。これは、生徒たちが入学して卒業するまで胸に着けるバッジのエンブレムがのいばらで、卒業生がそれを懐かしく思うことからつけられた名前です。こののいばらのエンブレムはルターの紋章から取られていて、形は三角形で、その三辺は、私たちの体を構成する身体、知性、精神を表し、この3つが調和のとれた発育をするように教育を行うとい

う私たちの責任を表しています。中心にのいばらがあります。これはもちろん、純潔、美、命、成長を表します。このばらは赤い地にはめ込まれていて、赤い地は、あがないを表します。イエス・キリストの献身、イエス・キリストに従う者の献身なのです。

新入生はみな『ヨハネによる福音書10章10節』の「私が来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである」という学校の聖句を学びます。また、学校のモットーである「感恩奉仕」を学びますが、これは原文の英語「感謝の奉仕 (grateful service) よりもっと美しい言葉です。聖句やモットーの言葉の意味を学ぶということは、それ自体がキリスト教教育なのです。でも、この聖句やモットーの言葉の意味を十分に学んだかどうかは、3年間の高校卒業後あるいは6年間の中学高校卒業後に分かることなのです。そして、これこそが、九州女学院の高い目標です。

このゴールを達成するには、最初に教師をクリスチャンの指導者にしていかなければなりませんし、このことを強く強調しなければなりません。毎年クリスチャンではない教諭を採用いたしますが、ほとんど例外なく、キリストに導かれていきます。クリスチャンの教師たちが、つねに、喜びや苦悩の中で、互いに自然にクリスチャンの仲間として、気持ちを新たにしながら自らを高めていきます。1日の仕事が始まる前に短い朝の祈りの時間を持ちます。また、毎日の学校礼拝のときには、クリスチャンの教師が順番に礼拝を担当します。

昨年秋、教師たちは、院長、チャプレン、宣教師の指導のもとで、聖書研究と討論を行う3つのグループを作りました。この研究会は、新学期も開かれる予定です。また、夏休みになりましたら阿蘇山のYMCAキャンプ場で、2日間の教師の研修会を行いたいと考えています。そこでは、おそらく、キリスト教教育の講義、聖書研究、キリスト教教育の視点から見た実践的な問題を討論して、祈りを捧げていくことになるでしょう。部外者の方が学校の中に入っ

てくると「違う雰囲気」を感じるとよく言われますが、それはこのような教師たちがいるからなのです。学校が設立されてからこれまで、神様が皆さま方の祈りに答えてくださっているからだと思っています。

(中略)

毎日テーマをもって聖書を朗読し礼拝を行っていますが、この毎日の礼拝は体系的に準備されています。また、この毎日の礼拝は、その時々により趣向をこらし、生徒たちの音楽を織り込んだり、偉大な聖画の解説を行ったり、教会の牧師を招いて話をしてもらったり、賀川豊彦博士、バル博士 (Dr. Paru)、ローザ・ペイジ・ウェルチ夫人 (Mrs. Rosa Page Welch) のような著名な日本人や世界のキリスト教指導者を招いて、講演をしてもらいます。感謝祭、クリスマス、イースターは私どもの学校の祈りや礼拝において最も重要なときです。これらの時期には、慈愛園のことや慈愛園の支援、ハンセン病患者の未感染児童施設である立田寮、リデル・ライト記念老人ホームについて考えるときなのです。こうした折には、贈り物をしたり、歌を歌ったり、きれいなダンスをしたり、キリストの降誕劇をしたり、その他印象的な催しを行って、私たちの愛や気遣いを表現いたします。

(中略)

これらの活動にはすべて教師たちの協力が必要ですし、協力は熱意や誠意をもって行なわれる必要があります。これらの活動の経験をきちんと積んでいけば、生徒たちは、「誰がこの奉仕を引き受けてくれますか。誰を派遣したらよいでしょうか」という神様の声が聞こえてきますし、「はい。私が引き受けます。私を派遣してください」という返事をすることができます。社会にはいろいろな奉仕があります。看護師として、医師として、教師として、社会福祉ワーカーとして、伝道者として、それに主婦として、いろいろな立場で奉仕していくことができるのです。